駒澤大学心理学論集，2008，第10号，79-87
Komazawa Annual Reports of Psychology, 2008, 10, 79-87

原　著

救世軍の山室軍平と禁酒運動――自助努力，社会事業，宗教的救済のはざまで

葛西 賢太

Gunpei Yamamuro of Salvation Army and Japanese Temperance Movement: among self-help, social campaign and salvation

Kenta Kasai (*Center for Information on Religion*)

ABSTRACT

As one of the representatives of Japanese Salvation Army, Gunpei Yamamuro led a variety of social work campaigns. The Temperance thought was important for Salvation Army, because drinking was considered the fundamental cause of poverty and depravity of the city laborers and their families in modernizing Japan. This paper examines the three pillars of his Temperance thought. 1. Self-help ideas in Taoist popular book and his will to succeed in his youth; 2. Grounded theories of social campaign of Salvation Army; 3. Religious experience (holiness) in Salvation Army; these three are the pillars. Yamamuro's originality was first in his difference from other teetotaler who negotiated for the secularization/detachment from Christianity of the temperance movement. It was also in his focus on the personal transformation (religious experience/holiness) even when he devotionally committed to the poor and understands the causes of the problems as social. He believed personal/religious transformation as essential to empower laborers who despaired of economic predicaments.

KEY WORDS: Gunpei Yamamuro, social campaign, social work, Salvation Army, holiness, self-help

この論文は，禁酒運動家としての救世軍山室軍平の思想を検討するものであり，近代日本における「自律」の意味を考える，より広汎な研究の中に位置づけられる。

山室軍平（1872-1940）は，社会事業を重視したキリスト教運動・救世軍を，日本において代表する人物である。救世軍は年末の駅頭での募金運動「社会鍋」や，中古品の廉価販売による慈善活動などで，多くの人の知るところだろう。太鼓やラッパなどの楽器を奏で歌を歌いながらの街頭での伝道で，「チンドン宗」などと揶揄されることもあった。また遊郭地帯で娼妓の自由廃業を勧める説教をし，業者から襲撃されるがそれに無抵抗で堪えるなど，「軍」の名にふさわしい行動力を持つ団体である。そのほか，禁酒禁煙運動，廃娼運動およびその社会復帰施設，刑務所出所者の社会復帰施設，ハンセン病者のための施設経営など，数多くの社会事業を行っている。

こうした救世軍の多彩な社会事業のなかでも中核をなしていたのが禁酒運動であった。しばしば禁酒運動は，単なる宗教的律法主義のように誤解されるが，我が国において明治大正期に宗教外の多くの人々を巻き込んでの世俗的運動であった。禁酒運動はその拡大につれ，社会問題たる飲酒の解消から，禁酒による生活の合理化に力点が移っていく。その後，国民的な禁酒運動は第二次世界大戦後大幅に縮小し，現在でも継続しているのは救世軍，日本禁酒同盟などごくわずかである。ところで，キリスト者として，また社会事業家としての彼はよく知られ研究もされているのだが，彼が体現していた個人変革と社会事業を両立する理念は，禁酒運動を通して広く影響を及ぼしたに関わらず，十分吟味され位置づけられたとは言い難い。

この禁酒運動の中で，山室がどのように宗教的に個人変革を説くかを見ることで，彼のオリジナリティが見える。禁酒運動家は社会からのアルコールの（部分的）排除による社会改良に力を入れ，未成年禁酒法の法制化（1922年）などに尽力し，禁酒運動の宗教からの独立と大衆化を目指した。山室は彼らと目的をほぼ共有し，勧善勧学と禁酒による自助努力の実践を強調しながらも，その向こう側に宗教的な「聖潔 holiness」の価値をおいた。しかしこの「聖潔」は，一口に「キリスト

教的」といえる単純なものではなく，彼の分析的な創意工夫，救世軍的な社会事業実践力，漢学素養を踏まえた民衆思想と，メソディスト的な人間完成論とを併せたものであった。

このように，脱宗教を目した禁酒運動において，山室は独特の位置をなす。彼には多くの著書があるが，いずれもよく練られた構成の中に，日本の伝統的な民衆知やことわざなどの引用がリズミカルな文体の中に埋め込まれた，「講壇調」とも評される，誰にでも読みやすいものとなっている点で，近代のキリスト教運動の中でも際立った存在である。山室は意識して文章を磨いたし，民衆に伝わるよう，キリスト教的な語彙だけでなく，日本の伝統的な語彙を併せて用いた。このような宗教的救済と社会事業と個人変革との，山室軍平における結合の様相を示すことを，この論文の目的とする。

以下，まずは彼の禁酒思想の実際を，山室のベストセラー・ロングセラーである『平民之福音』，および彼が長年編集人を務めた救世軍機関誌『ときのこゑ』，特にその禁酒特輯号などの著作に見よう。ついで，彼の禁酒思想を支える三つの源泉と思われるものを検討する。それは，①自助努力を説く民衆思想，②救世軍の社会事業実践力，③「聖潔 holiness 」の思想，である。

最後に，彼の思想における個人変革という課題を位置づける。山室は自助努力の限界を個人的にも社会的にもたびたび認識させられる。自助努力を超えるところにあるのが「聖潔」と呼ばれる救世軍独自の宗教体験であり，神の恩寵を受け，その結果としてよりよい近代人として立ち上がっていく。そこには個人変革と社会事業と宗教体験との三つを並び立てる思想があることを示す。

山室の禁酒思想と著作

貧困に苦しむ都市労働者に酒代の負担を増し，心身を痛め，家族を苦しめて児童労働や売春，犯罪に走らせるものとして，飲酒は救世軍において社会問題の中核におかれている。したがって，飲酒の戒めはすべての山室の著作にわたって見られるのであるが，今回は山室の著作『平民之福音』と救世軍の機関誌『ときのこゑ』禁酒号に絞って検討しよう。

1899 年に刊行された『平民之福音』に加え，『禁酒のすすめ』は，多くの実例と読みやすい文体，工夫された構成により長く読み続けられ現在も刊行されている著作である。(1912 年初版，1988 年 38 版)。山室には『禁酒と基督教』(1931) という著作もある。しかしここでは，山室の個人変革思想全体とキリスト教とのつながりについて広く見たいので，これらの禁酒に特化した書籍の詳細な検討は他日を待つ。山室の思想について知るために『平民之福音』とならんで重要かもしれないのは，月 2 回刊の機関誌『ときのこゑ』である。

『平民之福音』は救世軍に入った山室が，妻との新婚旅行に代えての休暇において口述筆記で執筆したものである。この書全体がリズミカルな講壇調であり，その中に日本人に古くから知られた道歌やことわざなどを引く。「祈りても験なきこそ験なれ，願う心の誠ならねば」といった歌を用いたり，某有名寺院代表の複雑な戸籍簿を示して不倫の空しさを説いたり，具体的な数字をあげてのたとえ話を用いたりする本書は，具体的で読みやすく，また実際に広く受け入れられた。1940 年，タイトルの「平民」を誤解されての発禁処分に至るまで，多くの版を重ねた。

本書が主として主張しているのは，民衆の持つさまざまな迷信を捨ててキリスト教に改宗すべきということである。しかし注目すべきはこの主張の骨格をなす個人変革の思想である。都市に流れ込んだ多くの労働者が貧困にあえいでいた当時の社会において，貧富や身分の差を問題視するよりも，それぞれの職分に徹することが救済につながる，山室は自助努力と信仰によって豊かになれるとまで説くのである。本書の冒頭には若き日のイエスが大工仕事をする場面の挿絵もつけられ，平民＝労働者こそ祝福されているのだという印象を強めるものとなっている。彼は職分に徹すべきことについて，以下のように説く。

> 神様は，態(わざ)と智恵，力量，才能の，度合いの異(ちご)うた人間を，此の世に作り，各箇に相応したる職分，職業というものを授けて，此を尽くさす様に，し向けてお出でなさる。貧しき者と，富める者とともに世に居る，凡て之を造りし者はエホバなりとは，このことであります。車を曳く者があれば，乗る者があり，治めらるる者があれば，治むる者があり，雇わるる者があれば，雇う者があり，米を作って売る者があれば，之を買って食べる者があ

る。世渡りは狂言綺語と同じこと，上々も役。下々も役，車に乗るから偉いと限らず，曳くから詰まらぬとは申されず，また米を買うから貴くて，作るから賤しいという道理はない。人間の高下は其の為て居る，職業によって定まるものでなく，その職分を尽くす，心がけ一つで定まるものでござります。(山室 1899)

このような自助努力の思想は，けっして迷いなく示されたわけではない。山室は救世軍の諸活動の中で多くの貧困者の現実に触れ，自助努力の可能性と限界についてたびたび考えさせられたはずだ。貧困は彼自身にとっても課題であったのだから。彼の出自と思想の突き合わせに先立ち，『ときのこゑ』についてもみておこう。

『ときのこゑ』は，創刊期から山室が関わり，特に編集代表者となってからは（署名なしも含め）多くの記事を山室自身が執筆していた。そのため，彼の思想を強く反映しているとみることができよう。禁酒特輯号でないふだんの号は，信仰体験談が語られているのだが，救世軍に入り信仰で禁酒できた，夫や父親に禁酒させたといった体験談が目につく。救世軍が重視しているのは信仰を介しての人間の変革であり，禁酒はそれが最も明瞭に見えるテーマの一つなのである。

1917年，また1920年から1940年まで，毎年2月11日（現在の建国記念日，当時の紀元節）に刊行された禁酒特輯号は，救世軍外にも多くの読者をえて，最大で20万部を発行したという。内容は，救世軍内外の著名人の寄稿をえて，禁酒による日本人の生活の改善と合理化（最適化）を説くものである（後年になると禁酒による国力強化に力点が置かれるようになる）。山室も飲酒が，仕事の能率を低下させ，品性を堕落せしめ，家庭を破壊し，犯罪を増やし，健康を害し，脳の力を弱め，遺伝的にも悪影響を及ぼすと説く。寄稿者にはこの当時の著名な禁酒論者で，未成年禁酒法を制定させた根本正議員や，日本禁酒同盟事務局小塩完次などの名もある。内容は禁酒の経済効果などの数字を示し具体性を強調するもので，国内飲酒量と米浪費，大量飲酒者の優生学的問題，禁酒企業例やその効率向上などがあげられている。内容も寄稿者も，当時の『禁酒の日本』などの禁酒雑誌と重なっている。

『ときのこゑ』自体は救世軍の機関誌であるが，「禁酒特輯号」はとくに外部に配布することを意図しており，救世軍組織を駆使して山室はこのメディアを積極的に頒布せしめた。通常号はB4サイズで一部8頁5銭（1921年）だが禁酒号のみは一部16頁10銭で売られた。なお普段の『ときのこゑ』は信仰体験談に力が注がれてはいるが，寄稿された禁酒記事を除いては全体のトーンに大きな変化はない。禁酒特輯号の次の号では，前号の頒布実績が名前・小隊（教会）名入りで発表される。「昨年〔1927年〕の禁酒号は大変な好成績で実に十三万部」も購入があったと，救世軍メンバーへの年頭の書簡において，山室は賛辞を贈っている（山室 1928）。

山室は諸方面の禁酒運動家の言葉を説教に引用するので，禁酒運動家と山室の主張はさほど違わない。異なるのは，山室や救世軍メンバーの体験談において，「基督を依り頼み」信仰によって飲酒欲求から救われたということが語られる部分である。たとえば，「禁酒した丈でなく，進んで信仰の道に志し，天の真の神様に頼縋って，基督の御救いを受けることである」，あるいは「私は酒の害を悟って昨年禁酒して以来，幾人かの人に禁酒を勧めて禁酒会員にさせました。しかし暫くするとたまらぬほどに飲みたくなりましたが。自分の導いた会員の手前，意地と我慢で漸く一年間支えて来ましたが，モウこの上の我慢はできぬと思っていたときに救われました」(ときのこゑ 1920，2月11日（580号），15頁，字句を現代的に改める）というように。一方，当時の禁酒運動家の多くは，運動の普及の戦略として宗教思想からは距離をとろうとし，近代化の一環として禁酒運動を位置づけようとする。

この論文では，山室軍平が禁酒運動による個人の変革をどのように信じ，またその限界をどのように見据えていたか，どのようにキリスト教信仰が関わるかを明示しようと考えている。しかしそうした矛盾は，これらの著作を単発で見るだけでははっきり見えず，著作と山室の人生とをつきあわせたときに浮き彫りになる。したがって，救世軍及びその機関誌のたどった道については触れず，次節以降，山室の人生をたどりながら，個人の自己変革という主題が山室においてどのように位置づけられるかについて考えたい。

山室軍平の生い立ちと自助努力の思想

山室軍平は，1872年，岡山県の寒村にて生まれる。叔父の杉本弥太郎の質屋業を継ぐ約束で養子となり，杉本を通して漢文素読の手ほどきを受け，功過録などの自助努力を説く思想にも触れる。また質屋業を通して自身よりさらに貧しい人々の生活にも触れる。学業優秀で志の高かった山室少年は上京して学ぼうとするが反対され家出，東京で活字工として生活を始め，廃嫡され山室姓に戻る。26歳で同志社入学。山室は，『フランクリン自伝』著者のベンジャミン・フランクリンや，救世軍創始者のブースが若き日に活字工だったことを確認して，勇気づけられる。

のちに山室は，当時評判であった救世軍Salvation Armyの創始者William Booth著，The *Darkest England and the Way Out*（『最暗黒の英国とその出路』）を友人と共に読み感銘，救世軍に入隊。日本人最初の救世軍専従職員となり，『平民之福音』や『禁酒の勧め』など数多くの著作を刊行，説教，講演，機関誌『ときのこゑ』編集，救世軍の運営と社会事業などに多忙な日々を送る。1940年3月17日没。

山室は，彼の自助努力思想の源泉として功過格，陰騭録とよばれる書物を挙げる。これらはいずれも民衆信仰のテキストで，さまざまな版がまるで週刊誌のように広く普及していた。説かれているのは，行動を一覧表にし，点数を付けて善行を奨励，一覧表を神仏に供えて祈祷することにより所願成就されるという考え方である。具体的な例として，父母の教えを守り背かない，師の恩を忘れずよく敬う，魚蠅蟻蚊虻など小さいものの命を救う，などが挙げられている。忠孝や生命尊重などの規範通りに実行し続け積善を貫くことにより，やがて立身出世も叶うというのである。

彼は実際に手帳に記してみるが，思うようにいかず破り，試みては捨てを繰り返し，結局止めてしまう。山室自身が，自分の努力がたびたび誘惑に屈することに罪責感を抱いていたこともあるが，一方で，積善による立身という内容が彼のおかれた現実と噛み合わなかったことを無視できない。叔父の質屋に鍋釜皿等の日用品まで質入れする人がある。彼らが悪人にはほど遠い状況を見ながら，しかし厳しく商売をしなければならないことに山室は苦しむ。

山室は，当時の多くの若者と同様，スマイルズの『西国立志編』やベンジャミン・フランクリンの『自伝』などの自助努力文学にも触れていた。自助努力文学は成功者の努力を称賛し評価する反動として，現在貧しい人々を努力不足・善行不足であると切り下げる一面ももつ。幸福な者はその幸福をもって神に愛されていることの証左とするという，「幸福の神義論」のロジックである。自分自身が善行を継続できずに手帳の頁を破きながら，自助努力の限界を私的に体験する一方，生活必需品さえ質入れせざるを得ない人々を目の当たりにして社会的にも自助努力の限界を見せられていた山室。彼は，これら自助努力文学に何か欠けているものがあるとはまだ考え及ばず，しかし満足できぬまま悩み，キリスト教に出会う。そして，さまざまな社会問題の改善に貢献したいと強く願うようになる。心を打った一節として，新約聖書の「ローマ人への手紙」7章（19-24節）を山室は挙げる。

> すなわち，わたしの欲している善はしないで，欲していない悪は，これを行っている。もし，欲しないことをしているとすれば，それをしているのは，もはやわたしではなく，わたしの内に宿っている罪である。そこで，善をしようと欲しているわたしに，悪が入り込んでいるという法則があるのを見る。すなわち，わたしは，内なる人としては神の律法を喜んでいるが，わたしの肢体には別の律法があって，わたしの心の法則に対して戦いをいどみ，そして，肢体に存在する罪の法則の中に，わたしをとりこにしているのを見る。わたしは，なんという惨めな人間なのだろう。誰が，この死のからだから，わたしを救ってくれるだろうか

善人であることを切に願っているのに，誘惑に簡単に屈する自分の惨めさ。善人であるのに貧しい人々。歓楽に走ることしか知らない貧しい活字工の同僚たち。自助努力文学への親しみと，貧しい者を見下す富者の多さ。山室がみすぼらしい姿で教会に通っていたゆえに，洗礼がなかなか許されないという体験もした。こうした彼にとって，自助努力はなんのためにあり，信仰はなんのためにあるのか。自助努力をする気力さえ削がれてし

まっている人々に救済はあるのか。彼は救世軍のストラテジックな社会事業活動に強く共鳴するが，岡田（1995）も指摘するように，禁酒を核におくその活動は自助努力による個人の変革をも重んじたものであった。

のちに彼が救世軍の専従職員として最初に著した『平民之福音』は，格差ある社会を批判するのではなく，立身出世を最善の価値とせず，それぞれの職分を尽くすことが，神の下のもっともよい生き方であると説くものであった。

救世軍創始者ブースの思想

山室にとってもっとも重要であったのは，自助努力による自己変革を説きつつ社会事業によって貧者に幸いをと目指す，救世軍の思想との出会いである。

救世軍は，もともとメソディストの伝道師であったウィリアム・ブース（1829-1912）により創始された。ブースは産業革命を経たロンドンに増加した貧しい人々の救済の方法を真剣に考えるようになる。都市労働者たちは，貧窮のあまり，子どもに危険な仕事をさせたり，妻娘に売春をさせたり，自ら犯罪に手を染めたり，飲酒や疫病で身体をこわしたり労働意欲を失ったりするに至っていた。1878年に救世軍を創立し，先駆的に社会事業を試みてきたブースは，その著書『最暗期の英国とその出路』において，「通例キリスト教的計画の中に発表されたり，キリスト教的博愛事業によって採用される通常の矯正策は，これらの見捨てられた階級の絶望的な悲惨を有効に処理するには，嘆かわしいほど不適切であること」を痛感してきたと述べる（ブース 1890）。

ブースが著作の中で展開したのは，“The Submerged Tenth”と彼がいう，英国人口の窮乏する1/10の人々を対象とした，個人変革及び社会事業の提案である。メソディストは「聖潔」holinessという宗教体験を経て個人が変革されていくことを信じる教派であるが，ブースの提案においても個人の変革が第一におかれている。個人に対する変革と社会に対する事業とは彼において相関しているが，個人が最も優先される。彼は第一に，個人が品性を変え，行為を改める（禁酒等）ことを説くのだが，第二に，個人の努力が難しい場合には環境を改める救済策を設けるよう求める。「推進されるべきすべての計画を支配する第一の要素として心に銘記すべきは，その人の人生の戦いにおける失敗の理由を構成するものが，彼の品性と行為とである場合には，その人を改変せねばならぬということである……第二に，救治策は効果を収めるためには，その個人の環境が彼の窮迫した状態の原因であって，彼の力ではどうにもならない場合には，その環境を改変せねばならない」というのである。そして，救済策は規模においても持続性においても即時性においても有効で，また有害な副作用がない点（方針3～7）が重視される。そして，都市内部，郊外の農村，国外に人々が生活を保障され幸福に生活ができるようなコロニーを設けるという，大規模な提案がなされている（ブース 1890）。現代から見ると，第三世界にコロニーを設けるという提案はそのままでは受け入れられないだろうが，宗教家の作った世直し案としては驚くほど本格的なものである。

本書は，メソディストの個人の変革の思想，さらに英国の困窮する都市労働者の経済問題や人間性の崩壊という倫理問題を見据えて，その救済を徹底して具体的に行った救世軍の社会事業の構想であり，山室にとって魅力的なものだった。山室にとってのよりどころは，個人の変革を説くだけの宗教ではなく，社会に向けても強力な行動力を発揮する，救世軍のような宗教でなくてはならなかった。

山室は救世軍に身を投じた後，機会あるたびに精力的に海外の社会事業を見学し，それらを精力的に取り入れて実行し，世界の救世軍の中でも広く知られるに至っている。

さて，禁酒はここに述べられている自己変革の中核に位置する。困窮の中での飲酒は，苦しみの慰めになるどころか，生活費を酒代に変え，家計を支えるべき者の労働意欲も奪い，人格や身体を傷つけるものと見なされる。したがって禁酒の優先順位は極めて高い。しかし，禁酒というのは簡単なことではない。「禁酒なんて簡単だ，100回もやっている」という冗談もあるぐらいで，自助努力だけでは叶わない部分がある。山室はこの部分をキリスト教の神に依り頼むべきと説くのではあるが，神が奇跡的に禁酒させてくれるという信仰ではなく，自助努力の部分が残されていることが特徴的である。神の恩寵と自助努力とを共存させる思想は，彼自身の宗教体験に端的な形で現れている。

山室の「聖潔」体験

禁酒運動に活発に取り組む救世軍の専従職員に向け，1928年の冒頭に，山室は以下のような書簡を記す。ここには，信仰なき禁酒では生き甲斐はない，「基督による禁酒」と「基督によって禁酒以上に大切なもの」を人々が得られるよう，救世軍メンバーのさらなる尽力を請うている。

> 日本でも幸に一日一日と禁酒問題に熱心する人が出来てきたのは，何より嬉しいことである。しかしながら禁酒したとて神を知らねば真に生き甲斐ある生活は営めない。其に基督なしには禁酒を実行するだけでも，むつかしくて何遍も何遍も見苦しい，やり損ないをして居る人達の多い世の中である。其であるから救世軍は基督によれる禁酒を実行する力を人々に与へ，又基督によつて禁酒以上に大切なものを与へるために健闘せねばならぬ（強調葛西，山室1928）。

救世軍の強い行動力から想像するに，ここでいわれる信仰による禁酒とはすべてを神，キリストにゆだねての奇跡的な力に委ねきった，単純至極なものと思われかねない。しかし，山室は信仰による奇跡とあわせ自助努力を強調し続ける。奇跡と自助努力とが両立されなければならないのである。

この点の詳細は，メソディスト系で重視されている「聖潔 holiness」という宗教体験についての評価を見ることで明らかになる。もちろん山室は聖潔体験をとても重視し，後述するように彼自身が体験できるように大きな努力を払っている。ところで，山室は聖潔体験によって人格が大きく改められると説くけれども，それは努力なくして得られるものでも，保たれるものでもないとみる。「聖潔を受けたからといって〔不注意による〕過失のない人間になるのでない。ただ〔作為的な〕罪を犯さぬ人間となるだけである」と山室は述べる。聖潔を受けたからといって，過失や誘惑のない，円満で堕落のおそれのない人になるのではなく，また聖潔を受ける努力，保つ努力の必要を説くのである。同じメソディスト系に属す，同時代人のホーリネス教団の指導者・中田重治（1870-1939）の所説と比較すると，山室の位置が浮き彫りになろう。中田は，聖潔を体験した信者は完全な存在であり，もはや罪を犯さないと断言する（池上2006）。ところが，山室にとっては，聖潔を体験しない人間は不完全ではあるが，聖潔を体験したとてミスを犯すこともある。また，聖潔はまったく受動的に得るものではなく，人間の努力によって至らしめるものでさえある。人間の努力が重要な位置を占めていることに注意しよう。山室は聖潔体験の必要を痛感し，準備をすすめていく（山室1929）。

> こうしてわたくしは形の上では，ともかくも一個の救世軍人となった。しかも日本人として，最初の士官にさえ任じられた。けれども，わたくしの心霊上の容態，また信仰生活の状況は，当時なおいたって不満足なところが多かったのである。わたくしはまだなかなか救世軍の真の精神をのみ込み，キリストにつく聖徒，また戦士として，このみいくさに参加するには，不十分な点ばかり多かったのである。わたくしは自分でそのことを知っているので，いく度かそのために神に祈り，聖書を読み，またあるときは断食祈祷をして，さらにまさった心霊上の経験を得るために精進するうち，はからずも救世軍で高調する，聖潔の教理に出会うこととなった。

救世軍の諸活動を率いた彼の日常は，講演，説教，執筆，諸事務ときわめて多忙で，睡眠時間もかなり短く削っていたことが知られている。その彼の聖潔体験は救世軍に入った翌年の夏であった。彼は聖潔についていくつかの書籍で学び，感触をつかんだのち，新約聖書を再び通読，郊外で三日間の休暇を取り，断食と集中的な祈祷の機会を設定する。聖潔体験に至る準備と，体験自体を，山室（1929）は以下のように語っている。

> 時は明治29〔1896〕年8月20日のことであった。私はその時，三日間の暑中休暇をもらったので，それを機会に，是非とも確実な聖潔の恵みに入りたいものと，神奈川県富岡の海浜に引きこもって，しきりに考えたり祈ったりしたあげく，それに関しての頭と心の用意も大概調ったように思って，その朝は特に未明に起きて，海辺に腰をおろして静か

に目を閉じ，今一度おごそかにわが一切の罪，および罪かと疑わしいことを捨て去り，以後はただ神がなれと仰せられるままになり，なせと仰せられるままをなすために，生きながらえることを誓いながら，わたくしと，わたくしに属す一切の物を神の祭壇におき，「火をもって答える神」が来て，供え物を聖別してくださるのを待ち望んでいると，神ははたしてわたくしに来たもうた。そのみたまは下ってわたくしの心の汚れを潔め，すべて不純な，身勝手な思いをわたくしのうちから除き，そのあとに宿って，わたくしを「神の宮」となさったのである。

わたくしは東の空に面して坐っていたらしく，ふと目を開けば，赤い太陽がちょうど海の中から姿を現わそうとするところであった。見ているうちに海を離れて高く高く上ってゆくと思うと，はや山も水も野も原も草も木も，一面にその光を受けないものはないのであった。そうしてわたくしの霊魂の状態がまた，ちょうどそれと同じく，わたくしの胸のうちには今「義の太陽」であるキリストが輝くみ姿で臨み，またその光ですみずみくまぐままでも，すっかり照らしてくださることとなったのである。「われは世の光なり，われに従う者は暗き中を歩まず，命の光をうべし」，「神は光にして少しの暗き所なし，もし神の光のうちにいます如く，光のうちを歩まば，われらたがいに交わりを得，またその子イエスの血，すべての罪よりわれらを潔む」などという，神の約束はわたくしの上に応験されたのである。ハレルヤ。わたくしはその朝から，まったく潔められた生活に入ったのである。（強調葛西）

「大いなる愛が我が胸に宿り，何ともいえない幸福が生じ，希望が起こり，而して大いなる光明が全身に輝きわたるが如く覚えだした」と彼は表現し，昇る朝日と内心の神の光とが呼応する体験であったとしている。山室は，神に受け入れられ，聖潔されたと実感した。

これはもちろん，人間の理解を超えた力に圧倒されての神秘的な体験である。ところがよく注意すると，周到に準備されて得られた，人生の意味への気づきとする読み方が十分可能である。もちろんこの準備を，山室は人為として否定するのではなく，しかるべく集中して聖潔を受ける時を待つふさわしい行為であったと考えている。彼は宗教体験における，人間の努力によってもたらされる個人変革の要素をきわめて重視していたのである。

結論：禁酒思想を作り上げたもの

ここまで見たように，山室軍平の思想は，当時の宗教家と比しても，また禁酒運動家と比しても，また貧しい中から立身した人々と比しても，独自の位置を占めている。彼は当時の（クリスチャンも含めた）宗教家が，貧しい都市労働者に冷たいことに敏感であった。禁酒運動家の多くが禁酒運動を世俗化しようとしたのに対し，山室はそれを受け入れながらも，意地と我慢による禁酒に神の恩寵が加わらなければならないと説き続けた。彼自身の貧しい出自から，また質屋で働いた経験から，貧しい人たちの困窮を知っていた彼は，そこから離脱するような立身よりは，彼らに向いて彼らに関わり続ける立身を選んだ。しかし，当時の社会主義者がしたように体制を強く批判する道ではなく，むしろ山室と救世軍は真逆の道をとり，皇室からの経済的支援とお墨付きも受け，当時の日本の体制を肯定しつつ「禁酒興国」を説き，徹底して個人を対象とし個人の自助努力と信仰心の発現を促した。

山室が『平民之福音』で「上々も役。下々も役…。人間の高下は其の為て居る，職業によって定まるものでなく，その職分を尽くす，心がけ一つで定まるもの」と展開したような，己れの「職分」を受け入れる思想は，当時の社会主義者から見れば，自助努力の限界を見極めず体制の罪を問わない，不十分なものと見えたであろう。しかし，救世軍の社会事業やキリスト教の社会的意義についての山室の仕事を見ると，山室が自助努力の限界に気づいていなかったとは考えられず，むしろ田中真人（1991）のいうように，救世軍の行く末も含めた熟慮の上の選択であったと想像される。

したがって，『平民之福音』で説かれる「職分」思想は，単純な現実肯定・現実受容の勧めでも，現実を無視した自助努力の進めでもない。信仰さえすれば心身も家計も恵まれ豊かになるはずと説きながらも，救世軍の社会事業を通して，彼は甘くない現実と対面していた。彼は自助努力の限界

を超えたところでの神の恩寵を受け入れることを強調するが，かといって，単に信仰の奇跡を一方的に称揚するわけでもない。上に見たように，自助努力を超える個人変革の味わうべき一つの試金石として，彼は，禁酒および聖潔を位置づけるのだ。彼のこのような思想は，自助努力の思想に身をおいて自ら実践しそれを平易に説き，救世軍の社会事業構想に感化され自ら担い手となり積極的に発案もし，これら個人的・社会的努力を超えた「聖潔」体験を尊重するが，しかし「聖潔」体験における個人の努力の重要性も認めるものである。この三本の柱が，彼の思想をなし，禁酒運動に結晶されていた。

最後に筆者は，二つの点から，山室の思想の広がりを限界づけたかもしれない点について触れておきたい。

一つは救世軍をはじめとする禁酒運動が基本的に「悪より善へ」向かう運動として位置づけられたがゆえの限界である。『ときのこゑ』の禁酒体験談は，元大酒飲みたちの視点ではなく，飲酒を悪とし飲酒を善として勧める視点，かつて大酒飲みで今は禁酒している者の視点から描かれている。信仰による飲酒欲求からの解放が語られていても，それがどのようなものであったのかはあまりよくわからない。とくに，解放以前の飲酒欲求のすさまじさが語られず，このような悪行をなしていましたと反省的に語られるのみである。『ときのこゑ』編集に当たって，その体験の細部が要約されて「悪行」としてまとめられてしまったのか，あるいは元大酒飲みがその体験を語る言葉を持っていなかったのかはわからないが。

筆者は，現代の断酒自助会でアルコール依存のどん底における体験が率直に語られていることを捉え分析した。断酒自助会は，連続飲酒や幻覚体験，酩酊中の悪事や失敗や罪深いことをも率直に語られ，またその語彙が身につけられていく場である（葛西 2007 a, 2008）。飲酒を悪と位置づけ，禁酒運動をそこからの解放と見なした時点で，山室自身も禁酒者として外から観察するところに立ってしまう。ここからは外から呼びかけることはできても，(元)大酒飲みたちに，アルコールに依存する体験の中核に触れるような語彙は提供し得なかった。山室は強く個人の変革を望み努力を払いながらも，酩酊を語る語彙の提供という点では禁酒運動には限界があったと思われるのである。

第二に，三つの柱が山室個人においてとっている微妙なバランスは，彼の人生経験に大きく依存しているが，これをいかにして継承するかという問題である。山室は救世軍のメンバーに，社会事業にかける熱意や力強い聖潔体験について伝えることはでき，またメンバー自身が自助努力によって立身していく過程を励ましていくことはできただろう。しかし，山室のようなこれらの微妙なバランスの継承はできただろうか。『平民之福音』や『私の青年時代』，また『ときのこゑ』の，よく整理された構成に隠れた彼の思想の振幅は次世代に伝わっただろうか。単なる自助努力でもなく，単なる恩寵の強調でもない，社会事業だけでもない，それらに引き裂かれずに束ねる努力とバランス感覚は，容易に継承できないものである。それをさらに困難にしたのが当時の日本の国情であった。

禁酒というテーマのその後の経緯をたどるとそれがあきらかである。『ときのこゑ』禁酒特輯号では，戦時色が強まるに伴って，「禁酒報国」「禁酒興国」がより強く説かれるようになっていくようになる。また救世軍自体は，出身国である英国王室との関係を重視する皇室の経済的認知と支援も得ながら活動を進める。一方，山室の死(1940 年)の直後に『平民之福音』はタイトル誤解により発禁処分となる。また『ときのこゑ』は『日本救世新聞』のち『朝のひかり』と改題を余儀なくされた。1942 年 2 月 11 日『朝のひかり』禁酒号を刊行するが，その秋に他のキリスト教系機関誌との合同（同年 10 月）を当局より指示され，この号をさいごに以後，禁酒というテーマは後退してしまう。そして，第一次世界大戦後は，キリスト教婦人矯風会などの方針変更があり，救世軍は禁酒を維持する唯一のキリスト教団体となってしまうのである。

禁酒運動も救世軍も大衆に広がった運動でありながら，山室軍平の思想は，十全に大衆化されることはできなかった面があるかもしれないと，筆者は以上の 2 点から推測している。同時代の他の運動家とつきあわせての山室の思想の意義を引き続き検討していきたい。

付記

朝野洋氏（山室軍平資料館館長）に資料提供と多くのご教示を受けた。また調査過程で岡田典夫

氏が山室の人間変革思想について多くを明らかにされていることを知った。筆者は禁酒運動の中で彼の思想を位置づけようとしたのではあるが，資料の存在や思想の成立経緯など多くの点で学ばせていただいた。

引用・参考文献

池上良正（2006）．近代日本の民衆的キリスト教——初期ホーリネスの宗教学的研究，東北大学出版会．

袁了凡（1777）．和語陰騭録　無名上人訳（三浦尚司校註（2007）．和語陰騭録，梓書院）．

岡田典夫（1978）．山室軍平の人間変革論　アジア文化研究 10，国際基督教大学アジア文化研究所．

岡田典夫（1987）．日本における伝統思想とキリスト教の接点——山室軍平の自立論をめぐって　茨城キリスト教学研究紀要 20．

岡田典夫（1995）．日本の伝統思想とキリスト教——その接点における人間形成，教文館．

葛西賢太（2007 a）．断酒が作り出す共同性——アルコール依存からの回復を信じる人々　世界思想社．

葛西賢太（2008）．アルコール依存からの再生——断酒自助会 AA の機関誌に見る「回復」体験談　死生学年報 2008　1-28．

葛西賢太（2007 b）．書評　池上良正著『近代日本の民衆キリスト教——初期ホーリネスの宗教学的研究』東北大学出版会，2006 年　宗教研究，81(3)，354，157-163．

櫻川　生（1897）．余が信仰の来歴　興聖，41　救世軍供給部．

山室軍平（1928）．日本救世軍宛書簡「禁酒号の『ときのこゑ』に就いて」1 月 11 日．

山室軍平（1929）．私の青年時代　救世軍出版供給部，1984．

山室軍平（1934）．日本救世軍宛書簡，1 月 6 日．

山室軍平（1899）．平民之福音　救世軍日本本営．（鈴木範久監修（2002）．近代日本キリスト教名著選集，4，平民之福音/総合的基督教，日本図書センター，復刻）．

高道　基（1971）．山室軍平における聖潔の問題　基督教研究，36(2)，同志社大学神学部内基督教研究会．

田中真人（1991）．救世軍と皇室　同志社大学人文科学研究所編　山室軍平の研究，同朋社，308-335．

ときのこゑ：救世軍日本公報（『ときのこえ』（1987-1989）．不二出版，復刻）．

日本聖書協会訳（1955）．聖書　日本聖書協会．

ブース（1987）．最暗黒の英国とその出路，救世軍本営．

安丸良夫（1976）．日本の近代化と民衆思想，青木書店．